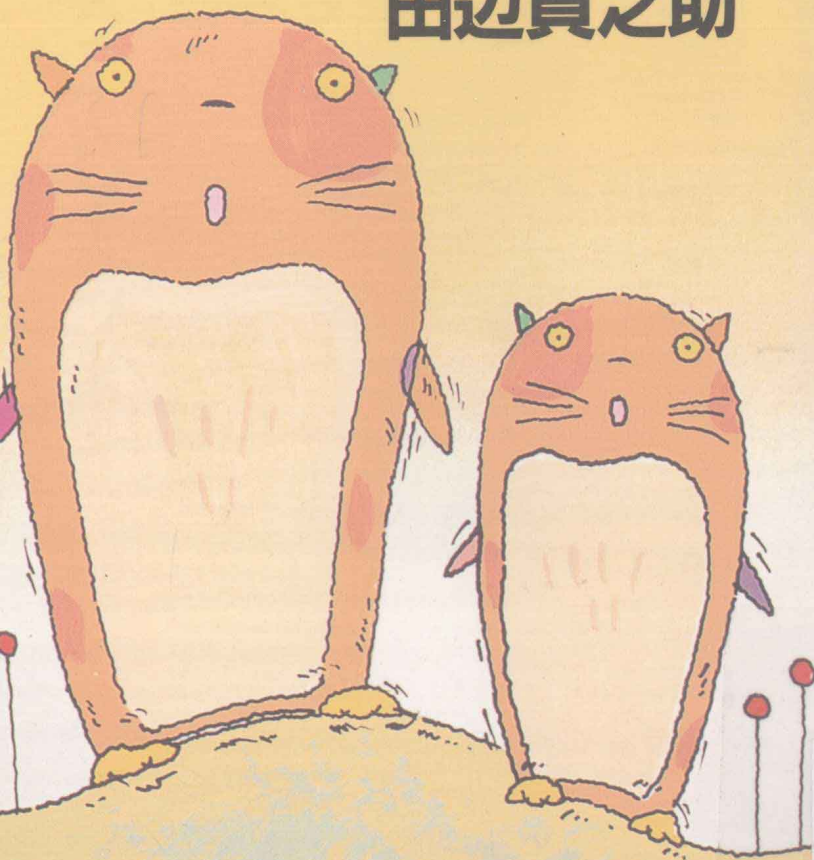


思わず 笑ってしまう本



☆江戸小話傑作集☆

田辺貞之助



田辺 貞之助 (たなべ ていのすけ)
1905年、東京江東区生まれ。東大卒。
東大仏文科教授を経て、早稲田大学
客員教授となる。1984年、死去。

思わず笑ってしまう本

平成14年12月25日発行

著 者 田辺 貞之助

発行者 小 島 米 雄

発行所 株式会社 潮 文 社

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-31

電話 03-3267-7181(代)

振替・00140-7-69107

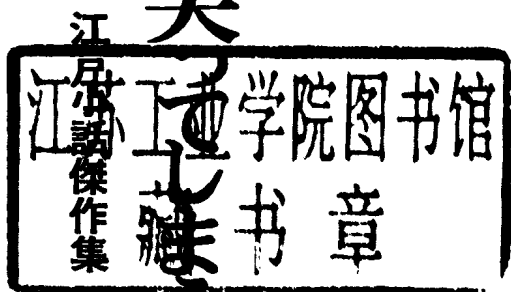
印刷所 齋藤文芸

製本所 越後堂製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-8063-1365-3

思
わ
ず
笑



し
て
し
う
本

田
辺
貞
之
助

まえがき

フランスに「クルトワ精神」と「ゴローワ精神」という言葉があります。前者は宮廷精神の意味で、主として人間および社会の諸現象の表向きのきれいな部分をあつかう文学をいい、後者はフランスの前身である未開時代のゴール（ガリヤ）の精神の意味で、人間生活のうちのあまり体裁のよくない裏口の方の部分を率直露骨にあらわす文学をいいます。

たとえば、細君の姦通をあつかった場合を例にとつて見ますと、有名な「赤と黒」や「ボヴァリー夫人」ほどの一流の文学では、亭主は全然細君の姦通に気づかず、その点での家庭争議は少しもとりあげられていません。非常に不自然です。ところが、小話では、亭主はいちはやく胡散くさい匂いをかぎつけて、てんやわんやの悶着をおこしています。こういう点から見ても、クルトワ精神はきれいごとにすぎる節々が少くありません。だといって、その系統の文学が嘘のうえに成立っているとは申しませんが、真実な人間研究にはゴローワ精神によるものの方が、ずっとふかいところをうかがうことができるといえます。

フランスではクルトワ精神は遠く中世紀の「宮廷風騎士物語」からはじまって、古典時代の悲劇やロマン派時代の詩文をうみ、ゴローワ精神は「狐物語」あたりを祖として自然

主義小説に開花しました。日本でも平安朝時代の『源氏物語』を筆頭とするけんらんたる文学は宮廷精神の所産であり、江戸時代の『浮世草紙』、『滑稽本』、『黄表紙』などはゴロー精神に匹敵する町人氣質のあらわれであります。

こういう雅と俗の対立抗争は文学の発展に大いに寄与しましたが、そのあいだにあって、フランスでも江戸でも、ゴロー精神ないし町人氣質の文学の一方の代表である小話は、あまり人目をひかない隠れたジャンルとして、だが野草のように力つよく生きてきました。このジャンルには文学史にその名を残す相当の傑作がなくありません。フランスの『百新話』、『八日物語』、『滑稽風流譚』がそれであり、日本の『宇治拾遺物語』、『今昔物語』、『古事談』などがそれであります。こういうものは主として貴族や僧侶の手に成り、道徳ないし信仰の点で庶民を教化しようとする訓話的な傾向がつよく見られます。しかし、時代がすすみ、庶民階級が社会に地歩をしめるにつれ、名もない庶民の手になるものがふえてきました。そして、町人たちのレジャーを埋めるもてあそび物となり、洒落や地口などをまじえて次第に小品化し、いわゆる軽口話となってきました。今日われわれが小話と呼ぶものは主としてこの時期のものをいいます。したがって、文章は粗笨、描写は下俗で、識者のひんしゆくを貰うものが多くなりました。しかし、それならばこそ、小話は世態人情を率直かつ無遠慮にとりいれて、彼らの日常生活の赤裸々な表現となりました。こういう風に考えてきますと、片々たる小話も単に卑俗な暇つぶしの読物ではなく、人間および社会の諸現象の適確な歴史であると認めざるを得なくなります。事実、小話は庶

民社会の理解のためには必要欠くことのできない貴重な文献となっております。

しかも、ここに考えなければならぬのは、庶民とは何ぞやということです。社会の階級は昔から王族、貴族、僧侶、武士、町人、百姓と細分されてきましたが、それは単に因襲的な家柄や職業上の区別にしかすぎません。ひとたび王冠をはずし、袴をぬぎ、大小をとった場合には、いずれも一個の人間にほかなりません。ところが、赤裸々な人間として考えること、願うこと、いとなむことは、身分の上下、職業の貴賤の別なく、同一であるはずです。この同一であるべき虚飾や銜氣のない人間性を、私は庶民精神と呼びます。したがって、小話は決して身分上の庶民だけのものではなく、人間全般の記録だということができます。小話の否定しがたい価値と滅却しがたい魅力はここにあります。

私が以前から友人たちの冷笑をうけながらも小話の研究に没頭してきたのは、このような理由にもとづくわけですが、小話研究は各国のものを孤立的に考えるべきではありません。どこの国の小話でも人間性の表現である以上、その線にそってかたくむすばれているのです。その故に、この潮文社から前に出版した『笑談手帖』(エスプリの花束)は英・米・独・仏の傑作と見られるものをあわせおさめております。小話研究はそういう広い視野に立たなければ、徹底した意義も魅力も得られないものです。

しかし、このごろでは、交通の発達とともに文化の交流が盛んになった結果、少くとも欧米諸国においては生活様式が、したがって意識内容が劃一化する傾向があると見え、小話が国際化して、国籍の区別が明瞭を欠くにいたり、特にお国振りの顕著なものが少くな

りました。近ごろフランスからくる雑誌の小話を見ても、古いものや外国のものを自由に粉飾して、なにか中性的な印象を与える話が大部分をしめ、墮落の跡がいちぢるしく、興味をそがれること甚だしいものがあります。

これにくらべると、江戸小話はいまだに当時の鎖国状態を固守して夷狄の悪影響をうけることなく、純粹の形をたもっております。頼もしい限りです。しかも、私自身、寄る年波のせいでありましょうか、近ごろ文学一般に関しても、フランスより江戸のほうへ興味をひかれることが多くなりました。よく聞くことですが、永年西洋の語学や文学をやってきたものは、年をとるにつれて、若いときには多少輕蔑の目で見ていた日本の言葉や文学へ心をひかれるようになるといえます。一種の精神的帰巢本能でしょう。まして、小話は、普通の文学のように観念的な意味でのふかい理解があれば足りるものではなく、その血肉に分けいり、身をもつて感得することを必要とするものであるだけに、日常のこまかしい生活感情に馴染のうすい外国のものは、年をとるにつれて隔靴搔痒の感なきを得ません。私が書肆の依頼に快く応じて、この本をまとめる気になったのも、こうした帰巢本能の然らしめるところであるようです。そこで、手許に蒐集してある江戸小話を全部読みかえし、そのうちの傑作と見られるものを収録してみました。江湖諸賢の御愛読をいただき、あらためて日本古来のエスプリを御鑑賞いただければ幸甚です。

新装版発行にあたって

本書は一九六五年に発行された「江戸小話傑作集」を新装改題したものです。

小話を先人からの大きな遺産として愛してやまなかつた、今は亡き筆者によつて活写された江戸の人々の笑いは、この世智辛い二十一世紀の今、ひとときわ、明るく輝いて見えます。

笑いⅡユーモアは人生の妙薬、人間の証。まず、一読、思わず笑つて頂ければ幸いに思います。

平成十四年十一月

潮文社編集部

目次

まえがき	三
睦月の巻	二
如月の巻	二九
弥生の巻	四七
卯月の巻	六三
皐月の巻	八三
水無月の巻	一〇一

文月の巻……………	二七
葉月の巻……………	三五
長月の巻……………	一五三
神無月の巻……………	一七一
霜月の巻……………	一八七
師走の巻……………	二〇五

挿 絵 風 間 完

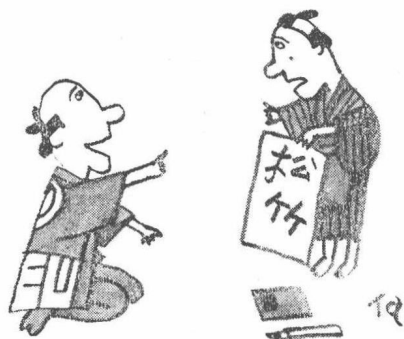
睦月^{ひつき}の巻

書初め

不器用な息子が書初めに《松竹》とかき、それを大いに自慢して、方々へ見せてまわったが、誰もほめない。そこで、餅屋は餅屋だと思って、年始に来た出入りの植木屋にみせると、松の字をひどくほめた。

「だが、竹のほうがよくできていると思うのだが」といえば、

「いや、そうじゃない。松もこのくらいひねっこびて、いがんでくると、百両がものはありますからね」



甚六

ある男が子供をふたりもつていた。上は男で甚六といい、十七、八だが、少し脳が足りない。次は女の子で十四、五。

二人の親たちが、もうそろそろ甚六に嫁をもらつてやらなければならないが、このごろのように商売が不景気では、金の工面がつかないとこぼす。それをそばで聞いていた甚六が、

「そんなら、おれと妹が夫婦になれば、金もいるまい」と、いった。

父親はひどく腹を立て、

「この野郎、大畜生同然のことをいやる」とどなつた。

甚六はさんざんしかられて、次の間へ立ち、妹にいった。

「うちのおやじはバカだよ。おれとお前を夫婦にしたら安あがりでいいといったら、とても腹を立てや

がった。だけど、自分たちはなんだ、親同士で夫婦になつていやがるくせに！」

外へは出たが

雪のふる夜中に、小便が出たくなって眼がさめた。あいにく、便所が外なので、雨戸をあけようとしたが、凍りついていてあかない。そこで、ふと思いついて、敷居のみぞへ小便をみっちり流しこみ、ぐいと引いてみると、氷がとけて、雨戸がさりとあいた。

「うん、うまい、いい考えだったな」

と、ほくそ笑みながら、外へ出たが、もうなにもすることはなかった。

千手観音

ある貧乏な寺で、宝物の千手観音を開帳して、参詣人におがませた。善男善女が山のようにあつまつた。そのなかに、ひとり、物知り顔の男がいて、内

陣にはいつて役僧にたずねた。

「千手観音という仏さまはお手が千本あるのに、お足はたった二本ですね。これはどういうわけでしょう」

役僧——「これはよいところへお気づきでした。おっしゃるとおり、そのおあしがたりませんので、お開帳をいたすようになったわけなのです」

加賀の千代

亭主が夜な夜な下女のところへ這いこんでいく。女房が腹をたてて、下女を二階へねかせたが、亭主は、やっぱり二階へはっていく。そこで、女房は梯子をはずしてしまった。

一夜があけて、あわてて二階からおりようとしたが、どうにもおりられない。二人で困りきっているうちに、腹がへってきた。下を見ると、女房がうまそうに朝飯をくいはじめた。そこで、顔を見合わせて吐息をついていると、下からなにか書いたものを

放りあげた。あけてみると「おきて見つねてみつねやの広さかな」と加賀の千代の句が書いてある。亭主は横手をうって「おれの女房だけあって、焼餅をやくにも上品だ」と感心したが、いくら頼んでもおろしてくれない。

隣の女房が気の毒に思つて、二階の物干から握り飯をさしだし「定めしおなががすいたでしょう。これでもあがつて我慢していらつしやい。おかみさんへはわたしがお詫びをしてあげますから」

「では、ありがたく頂戴いたします。それから、おついでに、これを家内におわたしください」と、なにか紙に書いたものをわたした。

隣の女房がそれを受取つて、その家の女房といつしよに開けて見たら、次の一句がかいてあった。「今朝かかに梯子とられてもらい飯」

近 火

「火事だ！」という声に外へとびだしてみると、火

元は五六軒さきの風上。これはとおどろいて道具を片づけはじめた。そのうちにおいおい出入りの職人たちも駆けつけ、いやもう戦場のようなさわぎになったが、ふと見ると、去年勘当した息子がせつせと道具をかつぎだしている。おやじが腹をたてて、「やい、手前は勘当したせがれじゃないか。どさくさまぎれに道具をもちだして金にかえようという算段か」

「滅相もない。たとえ勘当されてもおやじさまの家です。この近火に黙って見ていられますか。だから、一生累命になって手伝いにきたのですよ」

「そうか、そりゃ感心だ。お前がそういう根性になったのなら、勘当はすっぱり許してやる。はたらけ、はたらけ」

息子は大よろこび。「それはありがたい」と身を粉にくだいてはたらいた。そのうちに、火の手もおさまり、一同はつと安堵の胸をなでおろしたが、息子がどういいうつもりか、簞笥をあけて、袴や羽織、袴

をつけはじめた。おやじがそれを見て、「これこれ、せがれ、なにをしてるのだ、それを着て、また吉原へいこうつてのか」とがめた。

すると、息子が、

「とんでもない。じつは、火元のうちへちよっとお礼にいつてこようと思うのです」

笑い事じゃない

ある貧乏人のところへ泥棒がはいり、隅から隅までさがしたが、目星しいものも目星しくないものも、なんにもない。あるじは打ちわらをいれた紙の蒲団をかぶって、狸寝入りをしていた。

さがしあぐねた泥棒は、ためいきをつきながら、「ええ、いめえましい、こんなになんにもねえ家は見たことがねえぞ」と、こぼす。

それをきいて、亭主が思わずぶつと吹きたすと、泥棒が腹を立てて、

「ちくしょう、笑いごとじゃねえぞ！」

義 賊

泥棒が夜中にしのびこんで、あちこちさぐつてまわったが、えらい貧乏で、簞笥にもつづらにも着物がさっぱりなく、米びつには米がなく、味噌桶には味噌がない。さすがの泥棒も気の毒になって、夫婦を揺りおこし、

「おれは今夜お前たちの家へ泥棒にはいったんだが、あんまり貧乏なんで気の毒になったから、少し金をめぐんでやろう」

といって、金を二百疋出^{ひき}出した。夫婦は大変よろこび、疊に額をすりつけて礼をいい、泥棒はいい気持になって出ていった。

だが、ものの一、二町もゆくと、うしろから亭主が、「おーい、泥棒、泥棒」と大声で呼びながら追ってきた。泥棒は恩を仇でかえすかと腹を立て、そばへ来たら真つふたにしてくれようと持ちかまえていると、

「ハイ、おタバコ入れをお忘れてございます」

あんま

ひとりものの浪人があんまを呼びこんで、もませながら、よもやまの話をしていた。

「お前の住居はどこだ」

「八丁堀です」

「それは遠いな。この寒い夜更けに、眼のみえない身体で、そこまで帰るのは可哀そうだ。ここへとまっけて行きなさい」

「それはまことに、ありがとうございます」

こうして、一枚のふとんを二人でひっぱりあつてねた。だが、あんまの顔がいかにもきたなく、しかも、にらをたべてきたと見えて、息がとてなくさいので、やりきれなくなつて、

「なあ、あんまさん、そっちを向いてくれないか」
あんまはなにを勘ちがいたのか、

「とんでもない、それだけはお許しください」